

親子編

クラフトビールの夏
～親子で奏でる夢の共鳴～

あらすじ

都会暮らしのたくみは、久方ぶりの実家にクラフトビールを携えて戻った。疎遠だった父のせいじとビールを飲もうとしたとき、たくみは父が大切にしていたギターを見つける。埃をかぶったギターケースを開けると、二人の時間はビールと音楽と共に動き出し、その夢の音色は時空を超えて響き渡るのだった。

梅雨も終わり、セミの声があちこちから聞こえてくる六月下旬、たくみはひさしぶりに実家に帰ることにした。父のせいじと最後にまともに話したのはいつだったろう、そんな風に親子の距離が遠のいて久しい。実家から呼び戻されたわけではない。母から、住んでいる地域でしか手に入らないクラフトビールを買ってきてほしいと頼まれ、たくみはそのビールを手に実家に帰ってきた。家には、母の気配はなく、代わりに畳んだ新聞紙とほのかに漂う洪茶の香りが、彼の帰郷を迎えていた。居間のステレオからは、父が好きなビートルズのメロディーが流れていた。

「ただいま」

せいじはくつろいでいたが、息子の思いがけない帰宅に顔をほころばせ、「たくみか…いやあ、どうしたんだ、急に帰ってきて。母さん、今ちょっとちっと出かけてるんだ」と言った。

たくみは少し落ち着かない様子で、母から頼まれたクラフトビールを差し出した。「これ、母さんから頼まれたんだ。近所にあるビール専門店を買ってきたんだよ。」

せいじはボトルを不思議そうに眺め、ラベルをじっくりと読んだ後、「ほう、クラフトビールか。なるほど、確かに近ごろ流行ってるもんさ。こういうの好きそうだ、お前の母さん」と言って、おもむろに席を立った。「先に庭で一杯やろうか」

たくみは内心驚くと同時に、せいじのこの言葉に喜びが隠せなかった。「そうしようか。母さんには悪いけど。たくさん買ってあるし」

高田家の庭には、小さなテラス席が設けられ、二つのグラスに注がれたクラフトビールが、宵闇の中で輝いていた。せいじの前にあるのは50代をイメージしたというクラフトビールで、深い赤色が人生経験の深みと内に秘めた情熱を感じさせる。一方、たくみの前には淡いピンク色のクラフトビールが華やかな色を添えて置かれていた。淡いピンク色のクラフトビールが彩られていた。20代をイメージしたものらしく、ピンク色の泡はその繊細さが桜の花が舞うような儚さと柔らかさを演出して、柔軟に自分らしさを追求する若さを感じさせる。

その美しいビールの色に感動し、SNSに写真を共有しようと思ったたくみは、スマートフォンを構えた。ふと、物置にひっそりと佇むギターケースが目にとまり、ビールとギターケースを一緒に写真に収めてはどうかと思いついた。カメラアプリのフォーカスを調整しながら、ビールと

ギターケースの美しい組み合わせを撮り、何枚もの写真の中から、そのバランスが一番際立つ一枚を選び出した。ギターケースがさりげなく過去と現在の接点を作り、写真全体をより魅力的に見せた。

「この雰囲気、何だかいいな」とたくみは呟いた。庭のテラス席には静けさと新たな物語の始まりを感じさせる空気が満ちていた。

たくみがビールを飲もうと椅子に腰をおろすやいなや、長年、雨風にさらされて劣化が進んだ椅子長年の風化で劣化が進んだ椅子は、今にも壊れそうに軋んで悲鳴を上げた。

せいじは独り言のように、どこかに諦めの色を滲ませて呟いた。「椅子も俺も、そりゃ年を取ってるもんさ。」そして、立ち上がり、ドライバーを探してくると、慣れた手つきで椅子のネジを締め直した。

たくみはそんなせいじを見ながら、「ありがとう」としみじみと言った。一息ついて、たくみは自然に話しかける。「最近、いろんな音楽聴いてたら60年代ロックにちょっとハマってて。ビートルズも聴いてるんだ。親父が飲んでる50代のビールも一口もうらよ」

せいじは椅子を直し終え、少し腰を伸ばしながら、「たまにはそういうのもいいだろう」と返した。その手に持ったグラスにはルビー色のバルジャンビールが波打ち、芳醇なモルトの重厚さ、レーズンとベリーのような甘美な香りと味わいがせいじの緊張感を溶かした。ルビー色に輝くバルジャンストロングビールを優しく揺らし、レーズンとベリーを思わせる甘味と、芳醇なモルトの香りとウッディな重厚さがせいじの緊張感を溶かした。深く香りを吸い込むたびに、時間や経験の味わいが体中に広がるように感じられた。

たくみはギターケースに目をやり、思い切って尋ねた。「親父、このギター、昔弾いてたやつ？」

せいじは眉間にしわを寄せると、ケースを凝視し、懐かしそうに頷いた。「ああ、弾いてたよ。昔ちょっと夢を追いかけてたんだ」

たくみの目が輝いた。「夢って…ミュージシャン？」

せいじは過去の思い出が走馬灯のように浮かび、バンド仲間との熱気や失敗した時の苦い記憶が蘇った。「そんなもんさ」せいじは寂しそうに微笑んだ。

たくみは思わず、「ちょっと弾いてみてよ、親父。まだ弾けるんじゃない？」と勧めた。ビールを持つせいじは一瞬躊躇ったが、たくみの期待に満ちた視線に背中を押され、ギターケースを開けた。ギターは弦は意外にも丁寧に保管されており、ケースの中はしっかりと整理されていた。しっかりとケースの中は整理されていた。

「こんなに綺麗にしてたんだ…大事にしてたんだね」たくみはギターの状態を驚きと共に眺めながら、せいじに言った。

苦笑まじりに、せいじは首を振った。「いやあ、そんな雑に扱うわけにはいかないしな。弾いてた

頃の思い出があるからさ。だけど、指ももう動かないだろうし、埃かぶるだけだよ。」

たくみは意に介さず、ギターを取り出し、せいじに渡した。「そんなこと言わないでさ。」

せいじがギターの弦に指を滑らせ、若かりし日の記憶を刻むように曲をたどどしく弾き始めると、その音色が夏の夜の静寂を優しく染めていった。ピンク色のビールから桃の甘さがふんわりと漂う中で、たくみはその音色を味わった。ビールを口に含むと、将来への不安という苦みも抑えつつ、発泡する一つひとつの泡が、新しい試みに挑戦したい気持ちを高揚させた。たくみはすぐさまにスマホを取り出した。「親父、弾けるじゃん！いつかYouTubeに弾いてるところをアップロードしない？俺、編集とか手伝うからさ。」

せいじは昔、バンドの仲間たちと共に夢に懸け、その過程で挫折や失敗も経験していた。それらの記憶は、長い時を経てもつらい感情と共に心に刻まれたままだった。せいじは躊躇い、「もう長く弾いてないんだ。あんまり人に見せられるものじゃないよ」と本音を吐露した。

たくみはその時、せいじの目を見て優しく答えた。「そんなに恥ずかしがらずに、楽しめればいいじゃん。それに、親父が何十年も前の夢にどんな思いでいたのか、もっと知ってみたいしさ。」

たくみの言葉に感化され、せいじは再びギターを弾く決意をした。その日から、週末の高田家の庭のテラス席は、親子の練習場所に生まれ変わり、たくみはギターを弾くせいじの姿を熱心に撮影し、編集するようになった。練習を重ねるたびに、音楽を楽しむシンプルな喜びがせいじの心に甦った。

練習風景だけでなく、せいじが昔の曲を弾く様子や、たくみと共に新しいアレンジに挑戦する動画も撮るようになった。Youtube配信の準備はすぐに進み、最初の動画をアップロードする日、せいじは緊張した面持ちながらも、誇りに満ちた表情を浮かべた。

「親父、結構いいじゃん！」たくみが褒めると、せいじは照れくさそうに、「お前が編集してくれたお陰だよ。お前と一緒に始めて、本当に良かった。ありがとう」と言った。

高田家の庭のテラス席から、二人の夢の共鳴が最初の音を立てた瞬間だった。この数々の動画は、二人の時代や世代を超えた絆を世界に発信するだけでなく、過去の傷を癒し、新たな目標へと踏み出す力強い再生の物語を紡ぎ始めたのであった。

※この物語はフィクションであり、実在の人物とは一切関係ありません

